

## あびこの文化

発行人 大津 美崎  
我孫子市 高野山  
250-23  
04(7182)  
0861

あけましておめでとうございます

4月15日に嘉納治五郎銅像建立の除幕式挙行

会長 美崎 大津

平素は当会の活動に格別のご協力をいただき  
ありがとうございます。

会員の皆様、令和となつて初めての新年をどのよう  
に迎えられましたでしょうか？

一年を振り返って

昨年も国内で様々な出来事がありました。

平成の天皇陛下が4月30日に退位され、新たに皇  
太子徳仁親王陛下が5月1日に第126代天皇に即  
位されました。皇位継承に伴う「即位の礼」の中心儀  
式で、天皇陛下が即位を内外に宣言される「即位礼  
正殿の儀」は10月22日に皇居・宮殿で行われ外国の  
元首や各界の代表者ら約2000人が参列しました。

9月20日アジア初開催となるラグビーワールドカップ  
日本大会が開幕。日本代表は、グループリーグA組を  
全勝で突破し、初の8強入りを果たしました。準々決  
勝で南アフリカ代表に敗れるも、「桜の戦士」の勇敢な  
戦いぶりは、国内外で称賛を集め、チームのスローガン  
「ワンチーム」は、年末の新語・流行語大賞に選ばれま  
した。

9月から10月にかけて、立て続けに台風大雨被害  
が発生。9月9日に上陸した台風15号では、強風の影  
響で千葉県を中心に最大約93万軒が停電、広範囲で  
被害が発生し復旧まで2週間ほど要した地域もあり  
ました。10月12日に上陸した台風19号は、関東地  
方や福島県を通過。神奈川県箱根町では、1日の降水  
量が観測史上1位の922.5ミリを記録するなど、東  
日本の広い範囲で大雨となりました。東北地方や関  
東地方を中心に71河川140か所で堤防が決壊、浸  
水や土砂崩れなどで死者は90人を超えました。10

月25日には、台風21号に伴う記録的な大雨により、  
千葉県や福島県で死者が出ました。

10月1日、消費税率が8%から10%に引き上げ  
られました。外食や酒類を除く飲食料品などの税率  
を8%に据え置く軽減税率制度や、キャッシュレス決済  
を対象にしたポイント還元制度も同時に導入されま  
した。増税による増収は、社会保障の充実や、幼児教  
育・保育の無償化などに充てられます。

10月31日未明、那覇市の首里城から出火し、中心  
的建造物である正殿など計8棟が焼損。74年前の沖  
縄戦で焼失しましたが、1989年に復元工事が始ま  
り、1月に全体の工事が終わったばかりでした。琉球  
王国の王宮だった首里城は、2000年に城壁などが  
世界文化遺産に登録された「沖縄のシンボル」で、今回  
の火災が観光に与える影響も懸念されます。

嬉しい話題もありました。スウェーデン王立科学ア  
カデミーは10月9日、2019年のノーベル化学賞を、  
リチウムイオン電池を開発した旭化成の吉野彰・名誉  
フロローら3人に贈ると発表。この発明はモバイル・IT  
機器や電気自動車の普及などにつながっており、化石  
燃料に頼らない社会の実現に向けた貢献が評価され  
たものです。日本のノーベル賞受賞は27人目（米国籍  
の2人を含む）、化学賞では8人目となりました。

嘉納治五郎銅像建立について

当会の話題に目を転じますと、一昨年の春から開始  
した「嘉納治五郎銅像建立」プロジェクトについては昨  
年8月、原型を所有する台東区芸術財団に製造製作  
正式発注しました。現在、募金額は当初の目標額には  
達してはいないものの台座の作製を含めた必要金額は  
集まりましたので、4月15日(水)10時から天神山緑  
地(治五郎別荘跡)で我孫子市と共催で除幕式を行  
います。我孫子市は今年、市制施行50周年を迎え、当  
会も発足40周年という節目の年に当たります。東京  
オリンピックも開催されるこの記念すべき年に銅像建  
立の除幕式を挙げるのは大いに意義のあることと考  
えます。改めて皆様のご協力に感謝するとともに、多  
くの方の除幕式への参加を希望します。

## 嘉納治五郎銅像製造現場を見学

12月18日、嘉納治五郎銅像の現場を見学した。

当会が銅像の製作を発注した公益財団法人・台東  
区芸術文化財団から製造作業を受託した(株)岡宮美  
術は鑄物の町として有名な川口市にある。

東京都荒川区の日暮里駅と足立区の見沼代親水公  
園駅を結ぶ「日暮里・舎人ライナー」に日暮里駅で乗  
り換える。初めて乗る「舎人ライナー」は東京都交通  
局が運営するコンピュータ制御の新たな交通システム。20  
分弱後、舎人公園駅到着。駅には岡宮美術の岡宮社  
長が車で迎えに来てくれた。10分ほどで工場に到  
着。

現在の作業進捗状況は上半身の鑄造作業が終了し  
下半身の鑄造中ということだった。既に鑄造され工場  
内に置かれた上半身像は青銅(ブロンズ)製だが、まる  
で純金のように輝いていた。横に置かれた原型と見比  
べると髪の毛、目の表情、耳の形、着物の紋など細かい  
部分まで全く瓜二つなものには驚いた。年季の入った職  
人技が見てとれた。朝倉文雄氏製作の原型はもとも  
と上半身、下半身が別々に造られており、それぞれの  
鑄造後に二つを溶接するという。最終的に銅像の重  
量は約300kgになる。

岡宮美術では彫刻作家が原型の先に描く鑄造後の  
イメージにいかにつづくか、また超えられるかを目指  
していると言う。(上半身像の脇に立つ(上)原型(手前)と  
並ぶ鑄造後の上半身像)



## 祖父・治五郎について 「父と母から聞いた話」

平成21年の正月に講道館第三代館長嘉納行光氏  
(嘉納治五郎の孫が治五郎の思い出を述べている)

(講道館のホームページより転載)

「思えば早いもので、私が講道館、全柔連に勤務する様になってから今年で二十九年弱になる。就任した頃は、嘉納師範と直接接した方々が未だ未だ健在であったので、時期を失しない中に師範に関する色々な事をお聞きし記録に留めて置く事が後々の為にも必要と考え、実行に移そうとした事もあった。併しこの試みは結局実現できなかった。同様の事を父や母からも聞いておくべきだとの思いはあったが、身内のこと故何時でも聞けると安易に考えた結果、時だけがいたずらに流れて今は亡き両親から聞きたゞす事は永遠に不可能となった。この様な状況の中で、僅かではあるが師範を知る数少ない一人に私も入る事となった今、私が体験した断片的な記録、両親から聞いた事等を、以前書いた事と重複する部分があるかも知れないが、この機会に思いつくままを記す事にした。

(中略)

次に父から聞いた話を二つ程述べる事にする。その一つは、父は柔道を本格的にやる様強いられた事はなかったと聞いているが、子供の頃はやらされた様である。その当時師範は白帯をしめていたと、何かの折父が云った事がある。私は以前に、師範の段位は何段なのかとよく話題にされるが、師範は段位を與える立場なのだから自身は段位はないと聞かされていたのである程と納得した。これを裏付ける様に、講道館発行の『嘉納治五郎』に記載されている幾つかの写真を偶々見た所、山下義韶と稽古(明治三十六、七年頃)と説明書きの写真では、黒帯をしめた山下と白帯をしめた師範の姿がはつきり示されている。併し晩年近い師範の柔道衣姿の写真等では黒帯がしめられているので、その後柔道の普及発展と共に人数も増加し、白

帯では初心者と区別がつかないので、師範としての釣合を考慮して、師範自身によって又は門弟の意見を入れて、黒帯着用となったのではないかと想像される。

次に父から聞いた話として、父が師範から数学を教えてもらったと云う事である。父が育った頃の師範の家庭は、父を含めて八人の兄弟姉妹、その他に書生等同居する者を抱え、多くの人々が入り出すいわゆる大家族制の生活であったと聞いている。当然師範は多忙を極め、家でゆっくり寛くつろぐ暇などない事が多かったと考えられる。この様に世間一般に見られる父親を中心とした一家団欒だんらんの状態はとても望めなかつたと思つていただけに、この話を聞いて意外な感じがしたと同時に、世間一般と変らぬ父子が接し合う一場面が想像され微笑ほほえましいと思つた。おそらく問題の解き方を教えてもらったのだと思つたが、父の話では師範はいとも簡単にすらすらと解いて見せたと言ふ事である。

最後に母から聞いた事を述べる事にする。他愛ない事なので割愛しようと思つたが、あえて書く気になつたのは、昭和六年に嫁いで、昭和十三年師範が亡くなる迄七年間離れから主屋の師範の日常を見て来た母が、これを話す時の懐し気な風情(ふせい)が忘れられないからである。戦前は家庭の主婦は殆ど和服であり、男性は勤め人は外では背広、家では和服に着がえるのが一般的であった。母が見たのは多分師範が外出の為和服から背広に着がえる時の一瞬(ひとコマ)ではなかつたかと考えられる。主屋の間取りはおぼろ気にか覚えていないが、がらんとした和室があつた様な気がする。師範はそこで着がえをしたのであろう。その時師範は立つたままでズボン下を手に持ち、ひよひよいと拍子を取る様に片足ずつ器用にズボン下に足を通していたと云うだけの事である。昔の事であるから、母は毎日の様に「気嫌伺いに主屋に出掛けていたのであろうか。今となつてはそれさえ確める術もなく、何も聞く事ができないのが残念である。」

## 放談クラブ講演内容

### 「破壊消防から機械消防へ」(その3)

稲葉 義行

## 2 近代消防

### (1) 明治時代

慶応四年(一八六八)江戸幕府が崩壊し、明治となり、江戸が東京と改称され、明治元年(一八六八)五月十九日で定火消をはじめ武家火消は長い歴史を閉じました。

これに比べ、町火消は明治元年八月に東京府の管轄となりました。

明治三年(一八七〇)に「いろは四十八組」のうち十二組を廃止三十六組とし、本所・深川はそのまま残されました。消防人員は四千二百八十四人が整理されっております。

消防器具が充実し、英国から蒸気ポンプ一台、馬曳き腕用ポンプ四台、小ポンプ一台を輸入しています。

明治三年、東京府では消防局を設け町火消もその管轄下に入れられました(明治五年消防組と改称)。明治四年八月司法省警察が設置されると、消防局は廃止され、消防事務は警察に移され、その後も明治七年まで消防事務は、東京府と警察の間を転々とし、所管先が定まりませんでした。

明治六年、ヨーロッパ各国の警察・消防制度の視察から帰国した川路利良(かわじとしよし)が警察・消防制度の建白書を政府に提出し、明治七年一月警察を内務省に移し、東京警視庁を設置し、東京府下の消防事務もここに移りました。

明治七年一月二十八日、川路は、消防章程を制定し、近代的な消防の法律的基礎を築いております。

明治十三年(一八八〇)三月三十日消防組員とは別に、消防業務に従事する消防職員を採用するため「消火卒採用規則」を制定、これら職員をもつて、同年六月東京消防庁の前身である消防本部が誕生しました。

明治初期の消防は、自衛消防的要素を持った江戸消

防とは異なつた新たな消防制度（公設の消防組織が誕生するための胎動期でありました。

江戸期は行燈生活で暗い夜の生活であつたが、明治五年頃から石油ランプの国産化が始まり、一般家庭でも普及し始めました。この石油ランプの普及により、明治初期の火災原因の多くは石油ランプからのものでありました。初めは、不夜城といわれた吉原遊郭で頻繁に発生していましたが、一般家庭でも頻発するようになっております。東京府はランプの取り扱い方の布告を出して正しい使用方法を呼びかけ、火災予防に努めました。

明治十四年一月十四日消防本部は消防本署と改称され、同日、警視庁が再設置され、消防本署は警視庁に属し、以後、自治体消防制度が発足するまで消防は警察機構に属することとなりました。

明治十四年六月消防本部のもとに、現在の消防署の前身である消防分署が六分署設置されました。【第一分署（現日本橋消防署）、第二分署（現芝消防署）、第三分署（現麹町消防署）、第四分署（現本郷消防署）、第五分署（現上野消防署）、第六分署（現深川消防署）】

東京府下の火災は消防分署設置後も増加の傾向にあり、国産の腕用ポンプや公設消防になつて初めて蒸気ポンプを輸入するなど、消防器械の整備強化を図つていきます。

明治二十年四月火災出場の迅速化を図るため消防職員は勤務場所から一定の距離の間に居住するよう居住制限が課されました。

明治一十七年七月二十八日新築落成した消防本署の庁舎に望楼（火の見櫓）が設けられ、明治二十年代に市内十四か所にその望楼が設けられました。明治二十四年四月警視庁官制によって、消防本署は消防署と改称されました。

明治三十一年末に東京市の水道改良工事がほぼ完成し、鉄管水道が敷かれました。これと並行して消火栓の敷設が行われ、使用を開始しました。これを契機に、明治四十四年四月の吉原の大火、明治四十五年

三月の洲崎の大火を除いて、東京の大火は著しく減少しております。

消火栓を整備する一方、蒸気ポンプの増強計画が打ち出され、輸入ポンプは約六千円と高額であつたので国産化を推進し、明治三十二年に販売価格約三千円の蒸気ポンプの作製に成功、逐次、各消防分署に配置されました。

明治三十六年には火災現場における人命救助用のはしご車を採用することになり、ドイツ製の木鉄混合のはしご車を初めて輸入しました。

明治三十九年四月警視庁官制の改正に伴い、消防署は消防本部、消防分署は消防署と改称され、それまで、巡査の教育訓練を行う巡査教習所が警察消防練習所と改称され始めて消防の教育訓練機関が誕生しています。

## (2) 大正時代

大正デモクラシーの風潮を受け、東京においては、消防職員の身分制度及び待遇改善が推進されました。

大正二年六月に新たに消防手の階級が設けられました。

大正三年十月には新たに消防訓練所が開設（麹町）され、消防職員の採用試験や、新たに採用になつた消防手の新任教養、各種の教習や研修を行うようになりました。大正五年六月には任用制度の適正を期すため新たに昇任試験制度を採用しております。

大正六年から東京にイギリスやドイツ製のポンプ自動車を導入し、順次、各消防署所に配置し、大正九年までにポンプ車（はしご車等五十五台を整備しました。また、ポンプ車の採用にあつては、運転技術の習熟を期すため、消防教習所において、機関練習生の養成に努めております。（機関員はポンプ自動車の運転のみならず、消火栓や貯水槽から吸水しホースに消火水を送る任務があるため、機関運用の習熟を図る必要がある。）

大正六年には、消防本部、消防署所間に消防専用電線を架設し、次いで、大正九年から電流装置式による

火災報知機を街頭に設置する等、一般からの火災通報や、消防隊の応援要請の迅速化が一段と推進されました。

火災報知機の設置については、当時は、加入電話公衆電話の数が非常に少なく、深夜の利用には不便をきたし、語呂の似た町名は聞き誤りがあるという問題点がありました。これを補完するため大正六年第一期工事として日本橋地区に二十四基を設置、同九年に使用開始、その後、各区にも設置され火災損害の軽減に大きな効果を発揮しました。

大正十二年九月一日関東大震災が発生し、東京は都心部・下町地域を中心に、死者不明者約九万七千人、市内百三十六か所から出火し、焼失家屋約二十二万七千七百棟という大災害となりました。消防は組織機能の全てを投入しましたが、殉職者二十二名のほか、庁舎十八か所、ポンプ車等二十三台を焼失しました。

大正十五年七月には消防機構の整備強化を進めるとともに、消防機械力の再建に力を入れ、諸外国からポンプ車（はしご車等）を輸入し、消防力の充実を図っております。（次号に続く）

## 第136回史跡文学散歩報告

### 「湖北中里地区に将門伝説の遺跡を訪ねる」

牧田 宏恭

11月17日（日）開催の、恒例の「史跡文学散歩」は、当会役員の戸田七支（とだかずゆき）氏が講師・引率を担われ、参加20名内女性6名の歴史好き・散歩好きの面々が、午前9時に起点の「湖北駅」を出発した。若干の寒さを感じる朝ながら、快晴の散歩日和になつた。

「将門」については、旧相馬の当地をはじめ全国的にその名は広く知られ、唯一の史料『将門記（しようもんき）』を原典に、「将門伝説」として多くの方々によって研究もされ、諸説紛々語られている。その中、旧相馬の当地域（旧下総国相馬郡）の、現在の我孫子市、柏

市(手賀沼の対岸地域の旧沼南町・大津)には、将門に纏わる史跡が数多く存在しており、利根川対岸の守谷市、取手市、そして合戦の地としての坂東市も知られている。

講師の戸田さんに依ると『将門記』には、我孫子の地名は出てこないが、その欠落部分には、我孫子に於ける将門の事象が多く語られていたと思われる」と説かれる。そして本日の散歩コースは、戸田さんが、長年に亘って研究を続けられた末に得た、現在の結論「将門の本拠地が我孫子の湖北・中里に存在していた」として「(こ)は「相馬御厨(そうまみくりや)」の中心地」とすると、幾多の「将門伝説」が甦ってくる。「将門の本拠地」を傍証する場所(遺跡)を下記の順で訪ねることになった。以下、当日配布されたレジメをベースに記述する。

1. 伊勢山天照神社(我孫子市中峠(なかびょう))

湖北駅北口を出てすぐ近い処、景行天皇の御世、日本武尊との関係が伝えられている神社である。御厨の下司職であった「将門」が幾度となく参拝したと思われる。境内に市指定保存木(イチヨウ、スダジイ)、「21仏武蔵石板碑」がある。

2. 真言宗龍泉寺(我孫子市中峠)相馬郡衛正倉遺跡

天照神社から、国道356号線(成田街道)を東進、程なく「龍泉寺」に到着。この寺は当初、本日訪れる「将門神社」近くの東原(ひがしはら)地域にあったが、将門の死後、将門を討った藤原秀郷により将門の本拠地にあつた当寺が焼き払われ、後にこの中峠に建て替えられたとのこと。



3. 不動尊照妙院 (我孫子市中峠)

本院も龍泉寺の近く、中峠下公民館の奥にある。将

門の祖父「高望王」(たかもちおう)の御身仏が胎内に納められた不動明王像がある。(写真2)

4. 曹洞宗日秀観音寺(我孫子市日秀(ひびり))

照妙院から、成田街道をおおよそ800メートル東に成田方向へ進む。途中、「※湖北地区公民館」にて小休憩。(※後に7.の「将門亭」で取り上げる場所)

時刻は10時を少々回った。日秀観音寺に到着。(写真3) 本堂には「本尊「お釈迦様」があるが、街道側に「観音堂」があり、そこに祀られる「聖観世音菩薩」が「平将門の守り本尊」と伝えられていて、若くして「相馬の地」に移住してきた「将門」が以来朝夕「菩薩様」を参拝していたとされる。菩薩像は外からは、はつきり見えないが、金色立像が僅かに観られる。境内には「将門伝承」の一つ、後に将門を討つ側に立った「成田山」に関し、将門を愛する人々により建てられた、成田山新勝寺にそっぽを向けた音曲がり地蔵がある。

続いて伝承の地「将門の井戸」「将門神社」に向かう。成田線踏切を渡り手賀沼方向に南下、途中Y字道の左手に「↑将門の井戸」右手奥に「↑将門神社」の標識がある。(写真4)



5. 将門の井戸(我孫子市日秀)

将門が開き、生活に用いたといわれる井戸。以前あつた標柱は無く、仮標柱の奥に緑に囲まれ規模は小さいが「くぼみ」があり、僅かに水を溜めていた。(写真5)

6. 将門神社(我孫子市日秀)

「井戸」から程なく「将門神社」に到着。時刻は10時30分。(写真6)

戸田七支さんによれば、「将門神社」の由来について『将門記』には、「…天慶三年将門が戦没するや、その霊は対岸手賀村明神下より騎馬にて乗り切り、湖畔の岡陵に登り旭日の昇天するを拝した。のちに村人がその地に祠を建てた」とあり、神社の始まりを伝えているとのこと。

7. 将門亭(我孫子市中里)――前述4.で触れた「湖北地区公民館の場所」に符合

本報告文の冒頭に紹介した『将門記』に「…王城を亭南に建つべし。兼て横橋(ウキハシ)をもって号して京の山崎と為(為す)、相馬の郡大井の津を以つて京の大津と為(セ)む。―」と記されているとの事。すなわち、「将門社」の周囲は当時「手賀の海」であり、舟着き場(横橋(ウキハシ))があり、京の山崎にたとえ、且つ、相馬郡の大津(手賀沼対岸・沼南町に大津の地名)を京(滋賀県?)の大津とダブらせた。「横橋」は後述の「郡衙」と「将門神社」近く「かまくら道」の下(谷津)にあつた。「横橋」は「山崎」を指す。



王城の「王」は将門が「常陸・下野・上野国」の国府を一時的に治め「平親王」を名乗る。

「亭南・将門の居館」将門亭の南」が、現在、我孫子市中里にある「湖北地区公民館」に符合する場所である。ここは現在も「公用地」であることに或る種の因縁を感じる」との説明があった。

8. 「将門の王城」―相馬郡衛正倉遺跡(我孫子市中里)

本日、最後の訪問地に11時に到着。ここも将門に因む主要な地である。

「将門神社」の北に数百メートル、「将門亭」の南に数百メートル南にあたる中間地に「相馬郡衛(ぐんが)正倉遺跡」が且て存在し、古代の相馬御厨の中心を為す郡衙が在り、郡庁、館、正倉など政治・経済の中心地であった。将門は一時の間(こ)を「王城」としてこたといわれている。

この場所は、現在、「千葉県立湖北特別支援学校」となっていて、用地北側に「相馬郡衛正倉跡」の説明パネルが立っていた。ここも「公用地」である。(写真)

余談だが、当地湖北に「湖北音頭」がある。その詩に「湖北日秀にや桔梗は咲かぬ、桔梗仇花 嘘の花、将門さまの世命とり」とある。将門を裏切った妾「桔梗御前」を恨んだ歌で、当地には桔梗は植えない「しきたり」等々がある。

郡衙跡を後にし、出発点の湖北駅に11時30分帰着。2時間30分、約9,000歩の充実した時間であった。戸田さんの力説『平将門の本拠地は我孫子市・湖北中峠、日秀、中里地区であった』を、十二分に理解・納得する、本日の「史跡文学散歩」であった。



## プロジェクト報告

我孫子の巨木・名木を訪ねる会

「樹木観察会報告」第30回

【国営昭和記念公園の樹木・植物観察会】

実施日：十一月十五日(金)

牧田 宏恭

今回の訪問地は、先月(10月)の実施予定日が大雨で中止となり、本日に順延された行先である。

快晴の行楽日和に恵まれる中、総勢9名(女性2名)は、8時26分に我孫子駅を出発。武蔵野線経由立川駅に10時に到着、プロジェクトリーダーの佐々木侑さんを先頭に、目的地に向かった。

「国営昭和記念公園」は、昭和天皇の在位50年記念事業の一環として、太平洋戦争敗戦後、米軍が接収した旧立川飛行場(立川基地)の跡地560ha(クワールター)の一部を、国の事業として「緑の回復と人間性の向上」をテーマに整備が進められ、1983年(昭和58年)に開園、その後順次面積も拡大、2005年(平成17年)には共用化された「みどりの文化ゾーン」を加え「昭和天皇記念館」も開館され、総面積は180haにも及ぶ広大な公園である。

公園は、東京都立川市・昭島市に跨った武蔵野台地の一角に位置しており、総面積のうち、すでに165ha余りがオープン、L字地形の公園は東西2km(キロメートル)・南北の最長辺2kmの広さで、全面オープンに向け整備が続いている。園内には、多摩川水系の「残堀川」が流れ、隣接して「陸上自衛隊立川駐屯地」がある。

園内は、「みどりの文化ゾーン」「展示施設ゾーン」「水のゾーン」「広場ゾーン」「森のゾーン」の5つのゾーンで構成されるが、もともと飛行場跡地なので、既存樹木は少ないという歴史も浅く、この会の主目的の巨木観察は期待薄と思いつながら歩を進めた。以下、行動順に従い記述する。

### 1. みどりの文化ゾーン

立川駅にほど近い園の「あけぼの口」から入る。総合案内所で「昭和記念公園・昭和天皇記念館入場シールシート券」を購入。目の前の「ゆめ広場」では、「蚤の市」が開かれ、家族連れが賑わいをみせている。

「花みどり文化センター」(写真1)の入り口付近には植物博士・三木茂が命名の「メタセコイア」に因む展示があり、昭和天皇との関わりの説明もある。

センター内右手の「昭和天皇記念館」入り口から館内に入り、30分ほど見学。1階フロアーに天皇即位行事、諸活動、太平洋戦争敗戦がらみ展示、御料車、天皇の生物学研究展示等がある。館の屋上には上がると、多摩丘陵地域の奥、丹沢や秩父連山の山並みが快晴の青空のもとに広がる。



### 2. 展示施設ゾーン・水のゾーン

「立川口ゲート」をくぐると、茶屋やサイクルセンターがあり、「であいの広場」から天然石の舗石が西洋庭園の佇まいを見せる「カナル」の展望が開ける。「カナル」は中央縦長約200mに「芝生」、石積の歩道を挟み両側は、見事な黄葉を見せる100本余のイチヨウの並木。美しさに暫し見入る(写真2)。



「カナル」奥の大噴水も眼を引く。この辺りは若いカップルと、家族連れ、アジア系外国人のグループも多い。「カナル」とは、日本造園組合の解説によると「ヨーロッパ平坦部に造られた水路のある整形庭園」を意味するらしい。オランダの庭園はこのスタイルが多用されている様だ。

この公園は、「人と自然のための公園づくり」と銘打って、「豊かな自然環境の形成と生物多様性の保全」「環境への負荷軽減」「自然との触れ合いの場の提供」をテーマに取り組みを続けているようで、随所にそれを感じさせてくれる。



「水鳥の池」の周りの木立を日差しが優しく降り注ぎ、木の葉の裏まで色着きが美しい。美しい「水鳥の池」の風景をバックに本日の記念集合写真(写真3)を撮る。

樹木は先ほどの「イチヨウ」のほか、「メタセコイヤ」「ラクウショウ」「スズカケノキ」「カエデ類」「ケヤキ」「ハナミズキ」「カツラ」「ナンキンハゼ」「クスノキ」「アカマツ」「サクラ」「ウメ」等々、あとで向かう「森のゾーン」をふくめ、多種におよぶ。  
時刻もちょうど12時、「レイクサイドレストラン」で昼食を摂る。

### 3. 森のゾーン・みんなの広場

レストランを出て、公園を横切っている「残堀川」を跨ぐ「もみじ橋」を通って程なく、左手に「皇帝ダリア」が見事に花を付ける「ダリアの庭」に着く。「ハイブリッド・皇帝ダリア」と称し、様々な花の形状・色をしている。ただ最盛期を過ぎた様で、若干元気が無いようだ。黄色の花弁の大輪の真ん中に可愛らしいハチがとまって蜜を吸っている姿を見つけた(写真4)。



「みんなの広場」を右手にし、「こもれびの家」の周りに紅葉のグラデーションが見事な「イロハモミジ」など樹々を愛でながら「こもれびの丘」へと向かう。眼の前に日本庭園を観ながら、竹林横を通り「盆栽苑」



に入る。盆栽は趣を凝らした見事な鉢が見事だ。「日本の美」を愉しむ。(写真5)



日本庭園の周りの紅葉も素晴らしい。「オオモミジ」の名板を付けていた(写真6)。続いて「木漏れ日の里」の古民家を巡り、続いて、この公園の見所にされている「花の丘」に出た。つい最近まで「コスモス」が咲いていたそうだが、一週間ほど前に鑑賞時期が終了。刈り取ったばかりとのこと。残念である。次に季節に向かつて何が植えられるのだろうか?。途中、道路わきの「ススキ」の根元に、隠れたように淡い赤紫の「ツボミ」を付けた「ナンバンギセル」は初めて観た。



時刻も14時近くになり、午前に通過の「みんなの広場」に戻ってきた。「みんなの広場」の真ん中に、この公園のシンボルツリー「ケヤキ」の大木が眼に入った(写真7)。遠くから見てもその存在感は大きい巨木だ。早速、本日最初で最後だが、木の大きさを測定する事になった。

測る前に、幹回りは「4 m(メートル)は軽く超えて、若しかすると5.5 m以上かも?」と、それぞれ

勝手な推測をし、巻き尺にていざ測定。なんと結果は・・・、4.24 m!。周りに何もない広っぱなので大きく見えたようだ。しばらく巨木観察から遠ざかっていたので、「カン」に鈍りが出た。残念。しかし樹高は20数 mはあると自信を持って言いたい。  
広場を後に、帰路は公園の「西立川口」を後に青梅線の「西立川駅」へと向かった。時刻は14時45分を回っていた。絶好の行楽日和の中、全員元気に散歩を終了。  
午前中下車した「立川駅」から帰路乗車の「西立川駅」まで、約16,000歩、およそ12キロメートル、5時間弱の歩行であった。

### 第90回百人一首を楽しむ会

十二月二十日実施

美崎 大洋

#### 今月の歌(冬の歌)

田子の浦にうちいでてみれば白妙の

富士の高嶺に雪は降りつつ (004)

かささぎの渡せる橋におく霜の

白きをみれば 夜ぞふけにける (006)

山里は冬ぞさびしさまさりける

人目も草もかれぬと思へば (028)

心当てに折らばや折らむ初霜の

おきまどはせる 白菊の花 (029)

朝ぼらけ有明の月と見るまでに

吉野の里に 降れる白雪 (031)

淡路島かよふ千鳥の鳴く声に

幾夜ねざめぬ須磨の関守 (078)

#### (解説)

百人一首の中で「冬の歌」として区別されるのはこの6首とされる(異説あり)。前の5種は歌の中に冬を連想させる語句が入っているが、最後の歌は特に季節を判断させる語句・言葉がない。

荒涼とした須磨で、海向かいに見える淡路島から千鳥が渡ってくる。その寂しい鳴き声に、閑守が、つい眠りを妨げられ目覚めてしまい、真夜中に自分の孤独な境遇をひっそりと実感する。その寂寞とした感情を謳ったものだ。

「千鳥」は水辺に住む小型の鳥で、群をなして飛ぶ。調べてみて分かったが、歌の世界では、冬の浜辺を象徴する鳥で、妻や友人を慕って鳴く、もの寂しいものとされていたようだ。

〔作者〕

源兼昌(みなもとのかねまさ)。生没年未詳。12世紀初頭の人)。宇多源氏の系統で、従五位下・皇后宮少進にまで昇った後、出家した。多くの歌合せに出席して、「兼昌入道」と称した。

〔関連狂歌〕

淡路かた通ふ上戸の千鳥足  
幾夜寝酒を過(こ)しきぬらん

今月の雑学

「庚申の晩」…60日毎に訪れる

道教に起原。道教に三戸(さんし)の説というのがあり、人の腹中には上中下三戸の虫がいて、常に身を離れず、その人の罪過を記しておいて、庚申の日の夜、人の寝ている間に天に上って、天帝に告げる。しかしその晩に寝なければ、三戸は天に上ることができない。それで庚申の晩は寝ないという説。

平安時代から行われ、当初は公家や僧侶がやっていた、「すごろく」や詩歌管弦を楽しんでいた。『枕草子』にも庚申待の話が登場する。庚申信仰は今では廃れたが、親睦会などに名前を変えて今でも庚申待を行っている地方もある。庚申待ではとにかくその日は徹夜で過(こ)さなくてはならないため、眠らないように、顔にスミを塗ったり、胡椒をかけたたり、太鼓を叩いたりしたという。また籠城中の兵士達も庚申待を行っており、カフェインが入っている茶を飲んで眠らないようにした。

庚申の日の禁忌

「おはぐろを付けぬ」「男はひげをそらぬ」「髪を結わぬ」「洗濯をしてはいけない」「肥料をまいてはいけない」「遠道をしたり、山や漁に出てはいけない」「みそ汁を飲まぬ」

「遠道をしたたり、山や漁に出てはいけない」「みそ汁を飲まぬ」

庚申はせざるを入れて四猿なり

こらえ性なく、盗人をはらむなり(石川五右衛門、正月庚申の日に生まれる)

夏目漱石も庚申生まれ、本名は金之助(おてつ、おかね、銀次郎など)金に縁のある名前をつければ金に苦勞しない ↓ 盗みをしない)

庚申塔



庚申塔は、庚申塚ともいい、中国より伝来した道教に由来する庚申信仰に基づいて建てられた石塔のこと。庚申講を3年18回続けた記念に建立されることが多い。塚の上に石塔を建てることから庚申塚、塔の建立に際して供養を伴ったことから庚申供養塔とも呼ばれる。

庚申塔の石形や彫られる仏像、文字などはさまざまであるが、申は干支で猿に例えられるから、「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿(もともとは四猿(写真)であった。インドや東南アジアでは現在も四猿の像が残っている)を彫り、村の名前や庚申講員の氏名を記したものが多く。

庚申塔は沖縄県を除く全国で分布が確認されているが、地域によって建立数に差が見られる。確認されている現存最古の庚申塔は埼玉県にある庚申板碑で文明三(1471)年であり、当初は板碑や石幢(石塔のひとつ)などが多い。青面金剛刻像は福井県にある正保四(1647)年が現存最古とされている。なお、奈良東大寺所有の木像青面金剛は鎌倉時代の作とされている。

2020年の庚申の日

1月18日(土)、3月18日(水)、5月17日(日)、7月16日(木)、9月14日(月)、11月13日(金)

あびこだより 90号

志賀直哉「雪の日―我孫子日誌―」

村上智雅子

昔の地図を辿りながら、我孫子の雪景色を味わう

志賀直哉が我孫子に来てから五年目の大正九年二月に書かれた「雪の日―我孫子日誌―」は、読売新聞に四回にわたって連載された作品です。『志賀直哉全集』(岩波書店)の中でもわずか八頁の短編にすぎませんが、我孫子がより多く引用されている一文が含まれています。朝の雪から始まり夜の雪で終わる一日の記録を、端麗に白と黒の濃淡を際立たせてあるがまゝに描いています。

前編は、K君(九里四朗)と駅前まで供えの菓子と肉と魚と炭などを買いに出た道中の雪のありさまが端的に描写されています。帰りの道に手賀沼の枯葎の穂に雪が積もっているのを見て書かれたのがあの有名な一文で、志賀の透徹した自然描写とその奥底に謙虚な芸術観が示されていて、冬になると何度も読みたくなる一文です。

後編は、その日の夕方柳邸に呼ばれた家族を交えて団欒と彼等らしい芸術談義が続きます。武者小路実篤の「或る青年の夢」の英訳のことや間もなく英国に帰るリーチの三越での展覧会や当時注目されはじめたフェノロサのことなど、とりとめのない語り。志賀直哉、柳宗悦、リーチ、九里四朗、橋本基、藤岡作太郎等の白樺派らしい談話と空気が伝わって来ます。

当日は、その頃の我孫子駅付近の地図を辿りながら、「雪の日―我孫子日誌―」の紙上散歩を再現しようと思います。志賀が当日測った雪は二十三センチ。それ程の積雪はなかなか見られない昨今、志賀直哉の作品と我孫子の雪景色を味わってみませんか？

(プロジェクト報告)

第二十回短歌の会(最終採択の一首)

十一月二十六日実施

夜に入りて獣のごとく風吠ゆる  
老い夫(つま)なれど今宵たのもし

納見 美恵子

我がまちのさかえ願ひて手賀の丘に  
我孫子の誇り嘉納像建つ

佐々木 侑

意識なき友を見舞ひて耳元に  
わが名告ぐれば瞼ひらきぬ

藤川 綾乃

青き空恋ふるか白鳥ひそかなり  
吾も足音消して歩めり

大島 光子

孫の受験正月来れぬと娘言ふ  
はや教育ママになりしかと思ふ

美崎 大洋

雅なる日本語使ふ留学生

語る仕草に心温(ぬく)もる

飯高 美和子

一つ事終ふれば次の仕事あり  
原稿八つ締切近し

三谷 和夫

振袖を返す仕草もたおやかに  
七歳の孫ほの大人びぬ

村上 智雅子

劔岳の頂上真下まで来れど  
落石のため引き返したり

藤井 吉彌

楚人冠俳句「序跋詩歌集」より 杉村楚人冠

昭和十年

秋・冬

新涼や髪かき居れば膝遠し

絵の具解く指しめやかに夜の寒き

虫ないて風なき夜半を丸寝かな

曼殊沙華童子来らず豆腐を切る

山の湯の雪に明るき障子かな (湯瀬にて)

相依りて燃えぬし棺の崩れゆき

足弱の一年生にしぐれけり

盛花の雪にのせたる牡蠣の殻

今後の行事予定

□ 第137回史跡文学散歩について

日時 3月31日(火)9時我孫子駅集合

目的地 八柱霊園(嘉納治五郎、楚人冠などが眠る)  
アクセス 武蔵野線八柱駅徒歩18分

◎詳細は次号(3月号)に掲載します。

□ 「放談くらぶ」

日時 2月22日(土)14時〜16時

会場 アビスタ第2学習室

講師 村上智雅子氏(当会副会長)

演題 「志賀直哉の「雪の日」を巡って」

(7ページ「あびこ」より90号参照ください)

◎参加費 会員無料 非会員三〇〇円  
申込みTEL&FAX(七)一八五〇六七五 佐々木まで

□ プロジェクト「短歌の会」予定

第二十一回短歌の会

日時 1月28日(火)13時30分

場所 けやきプラザ10階小会議室

□ プロジェクト 巨木植物観察会

1月はお休み

2月は「船橋市民の森公園」を予定

□ 友好団体の催しもの、情報など

◎我孫子市史研究センター・市教育委員会共催

歴史講演会「幕末・明治維新期の下総国

―下総知県事から葛飾県の成立へ―

講師 飯島 章氏(前取手市埋蔵文化財センター長)

日時 1月26日(日)14時〜16時30分

場所 アビスタ・ホール

定員 当日先着130名(予約不要)

入場料 一般500円

問合せ 04-7149-6404(岡本氏まで)

◎我孫子の景観を育てる会

「八景歩きの写真展」12枚のパネル展

今後の展示予定(日時・期間)

1月7日(火)〜1月16日(木)近隣センターこもれび

1月17日(金)〜1月28日(火)近隣センターふさの風

1月5日(日)〜1月31日(金)図書館湖北台分館

1月29日(水)〜2月7日(金)布佐南近隣センター

2月8日(土)〜2月18日(火)新木近隣センター

2月19日(水)〜3月5日(水)湖北台近隣センター

3月6日(金)〜3月23日(月)ユネスコ湖北台公民館

3月24日(火)〜3月30日(月)アビスタ

4月1日(水)〜4月28日(火)図書館布佐分館

編集後記 今年の干支は庚子(かのえね)。干支を植物

で見た場合、変化が生まれる状態、新たな生命が兆し

始める状態なので、新しい事にチャレンジするのに適し

た年と言われる▲十二支では「子(ね)」「窮鼠猫を噛

む」「頭の黒い鼠」「袋の鼠」などがある。「大黒天の使い・

福の神として白いネズミ」もある。白い鼠は我孫子の

「子の神さま」と縁がある。多くの子を産む鼠は子孫繁

栄を意味し、沢山の鼠がいる家は裕福で富の象徴とさ

れた▲未来への大いなる可能性を感じさせる子年に建立

される嘉納治五郎の銅像。手賀沼沿いを走る聖火ラン

ナーは銅像を右に見上げながら走ることになる。(美崎)